「断乳の時期とその遅れが児に及ぼす影響 栄養法別断乳の時期と不安症状頻度」

南　部　春　生

要約：断乳の時期については、母の体重が正常に復する６～９ヵ月、う歯発症を予防するためには６ヵ月、母の焦慮、児の自立のためには12ヵ月、適切な離乳指導と実行があれば自然断乳と云われているが、定説はない。

断乳の早い、遅いを判断する因子を検討する目的で、その事前調査を行った。その結果

１．栄養法別には母乳６カ月群、母乳３カ月群、混合６カ月群、混合３カ月群、人工群の５群について、12カ月間の栄養推移をみ、母乳６カ月群は終始母乳を基盤に離乳を完了していた。

２．各群の母親が栄養、発達に関して訴えた不安症状は母乳６カ月群が人工群に比し有意に低率であった。

Key word：母乳、栄養法別、断乳、不安症状、事前調査

※札幌天使病院小児科（Dept. Pediatrics Sapporo Tenshi Hospital. HOKKAIDO）

研究目的：

適切な断乳の時期は乳汁栄養法がどのように備わるか、離乳食をどのように併行するかによって自づから異り、また母親の断乳意識のもち方、例えば育児休暇、子育て態度など、さらには保健指導関係者によるう歯発生予防、自立遅延危惧の思いなどが絡まり、定説に欠けるのが実状である。従って、授乳、離乳食、断乳、それにまつわる不安症状などを手元の資料で検討し、そこから断乳に感するアンケート調査紙作成のための諸因子を求めることを目的とした。

研究方法：

研究に際し、我々の施設がこれまでに行ってきた母乳栄養・離乳食のすゝめ方について述べ、研究対象としてはこの研究の意図を知らない保健婦に乳児健診票を任意抽出してもらい、12カ月間の栄養推移と母親の不安症状頻度を比較検討することとした。対象は全例第一子である。

１．当院における栄養法のすゝめ方

1）1989年のユニセフ･WHO勧告「母乳哺育成功のための10箇条」の中で母児同室が果たされておらず、目下採用準備中である。

2）褥婦が退院する前日までに集団育児指導を行うが、この中で「母乳哺育実践のための知識10項目」を不安なく、楽しく展開出来るように説明する。とりわけ①健康的な生活リズムを確立すること、②栄養学的断乳は６－９カ月、心理学的断乳は２－３年とし、その意義と実践を強調している。

3）離乳食については、1980年厚生省研究班による「離乳の基本」を追加改編し、親子が楽しく食行動をすゝめるように指導し、生後２・３・４カ月の間で水様食を１～２回、６・７・８カ月では舌でつぶせる固さのものを２－３回、９・10・11カ月では歯ぐきでつぶせる固さのものを３回摂取するように説明、実行させる。

4）以上の方法をすゝめることによって、当院における生後１カ月の母乳確立は、①健常児2500～3999ｇ群は78％、②＞4000ｇ群は92％、③2200－2499ｇ群54％、④1250～1999ｇ28％、⑤＜1249ｇ群12％、⑥帝王切開児群72

%、⑦高年初産児群71％、⑧新生児室で人工栄養を許可している施設群35％で、完全母乳栄養を実施すると80％が可能である。

5）完全母乳指導、生活リズム指導、生後30分以内の早期授乳指導など指導法別母乳確立頻度を生後3カ月までの推移でみると図1のごとくで、A群は93→87→83％、B群は80→65→50％、C・D群は2・3カ月で75％を維持しており、生後30分以内の早期授乳、生活指導の重要性が強く示唆される結果を得ている。

2．断乳に感するアンケート調査のための事前調査方法とその対象

1）対象はこの研究の意図を知らない当院保健婦に、健康な母親から正常出産し、12カ月間の乳児健診を健康的に終了し、現在24カ月を経過した乳児の健診票を任意抽出させたもので、その栄養法別対象数は①母乳6カ月群20例（男女10例づつ）、②母乳3カ月群10例（5例づつ）、③混合6カ月群20例（10例づつ）、④混合3カ月群20例（10例づつ）、⑤人工栄養群10例（5例づつ）の5群計80例である。

2）調査方法は各栄養群別に、①生後12カ月間の乳汁栄養の推移をみ、併せて離乳食の完了状態を確認すること、②栄養法別に主として栄養に関係した不安症状頻度の2点について検討した。

結果：

ここでは、主として母乳6カ月群と人工栄養群について図示説明を行い、この調査での判明した点について述べる。

1．断乳の時期については、母乳6カ月群では男女とも12カ月間の母乳が維持漸減され、10カ月、11カ月の自然断乳例では離乳食の完了が9カ月で完了してした。また12カ月で1日8回例、3－4回例があり、特に8回例ではう歯の発生をみていない（図2・3）。また母乳3カ月群は母乳不足、体重不安、情緒面の不安を訴える者が多く、母乳を12カ月間全うせず離乳完了も早かった。混合6カ月群は80％が人工栄養に移行し、離乳も早く、混合3カ月群も同様の傾向があった。人工栄養群では規則的に授乳回数が減少し、離乳食への移行も円滑であったが、母乳6カ月群に比し不安愁訴が多かった。（図4・5）

2．栄養法別、主訴・症状の中で栄養に関係したものは表1の如くで、混合6カ月群では母親の平均年令が31才以上と高かった。乳児健診には1人平均6回来診しているが、その主訴・症状の累積頻度は母乳6カ月、人工栄養群間で有意差があり、混合3カ月群を除く他の群においてもその傾向が伺われた。

考察：断乳の時期は生後何カ月頃が適切か、またその時期があるとかれば、それより早い遅いが児に及ぼす影響は何かを明確に示唆する研究は極めて少ない。

そこでこの研究では母乳の重要性を強く認識し、楽しい生活とりわけ離乳食への取り組みを絡ませた指導を行い、12カ月間の乳児健診を健康的に完了し、現在24カ月を経過した乳児の健診票から、栄養法別の離乳状況と栄養に関する不安症状を比較検討し、この事前調査結果から「断乳の時期を決定する因子」考察し「断乳に関するアンケート調査紙」の作成を考えることとした。

この事前調査で明白なことは母乳6ヵ月群は少なくとも12カ月間は母乳を維持しつつ離乳食を完了し、且つ栄養に関する不安症状が極めて少かったことである。このことは生後30分以内の早期授乳指導、母児同室制の徹底を改めて強調、実践することの重要性が示唆されており、母子関係の円滑な成立とも大きく関係することを意識した指導が益々必要である。この母乳6カ月群を除いた他の栄養群では栄養に関する不安のみならず、些細な不安は絶えず、仮に問題なしと判断されても、納得のいく説明指導が要望される時代である。この認識の上にたって考えた時、母親がいかなる栄養法を採用していくかは、まさに様々な不安要因によって決定されることになり、母親の健康維持に携わる関係者の①母乳を大切にする意識の昂揚と、②些細な不安に対して、適切な対応の出来る知識の蓄積が益々必

図1　指導法別母乳確立頻度

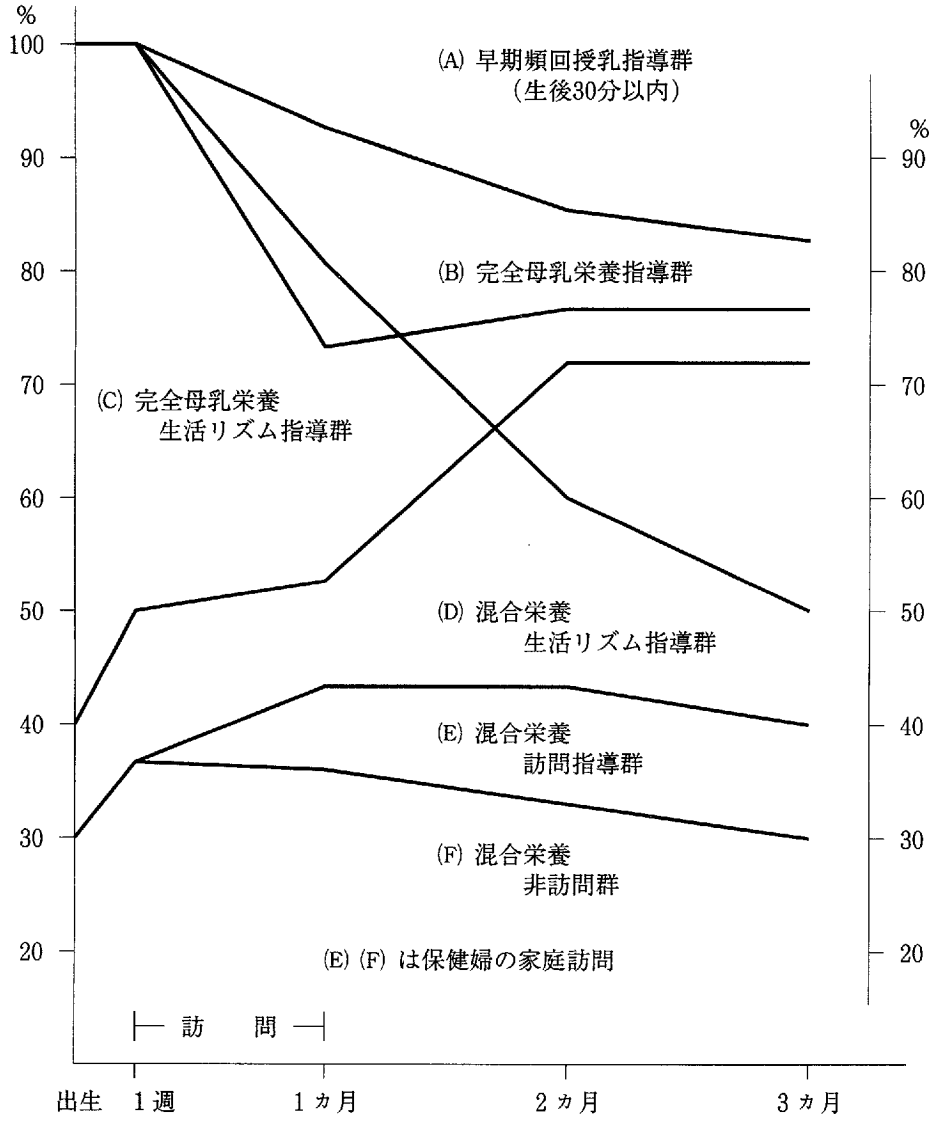
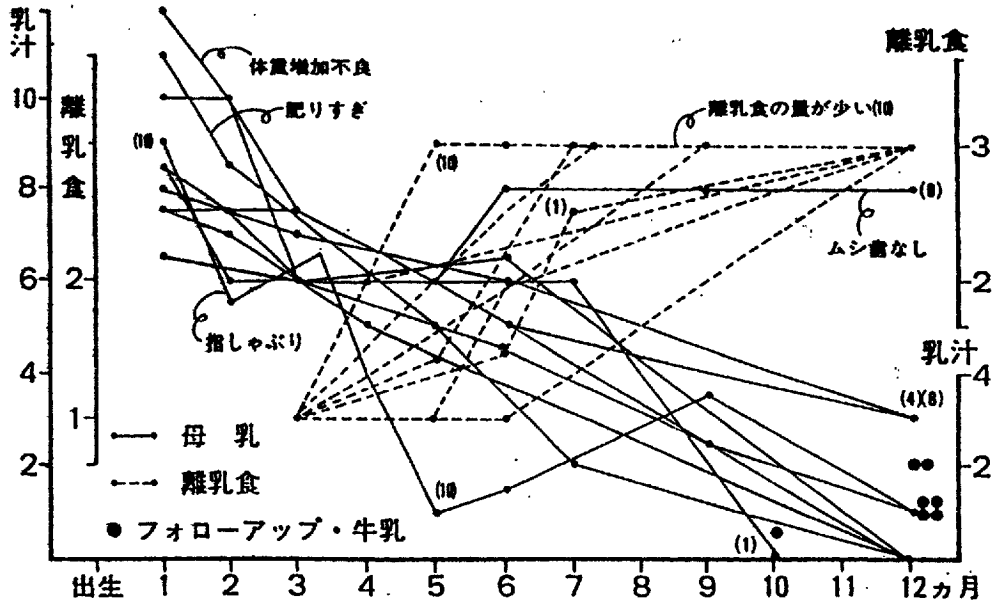


図2　Ⅰ　完全母乳6ヵ月→離乳食
(1) 男 児 10 例



Ⅰ　完全母乳6ヵ月→離乳食
(2) 女 児 10 例

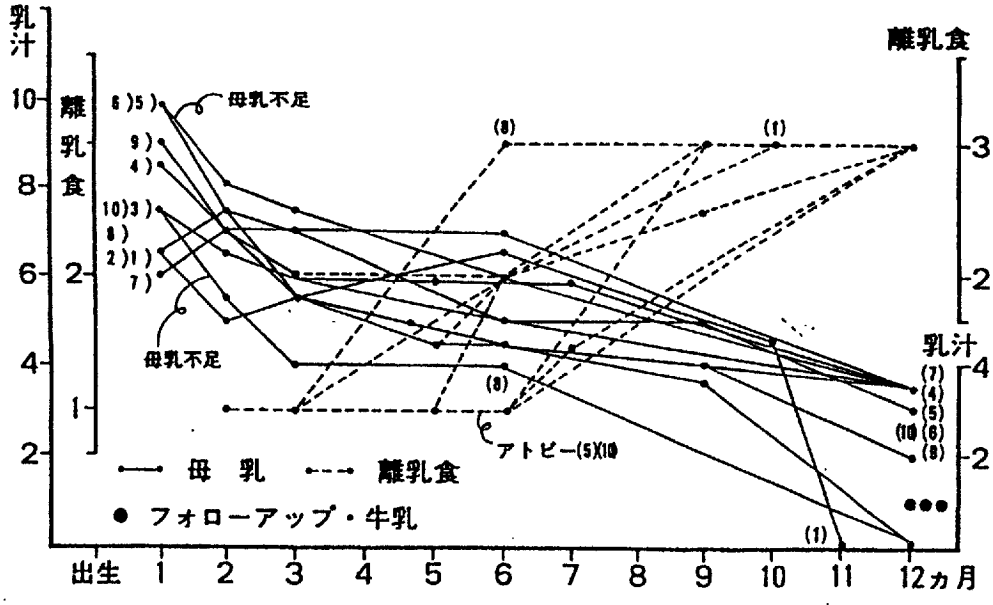
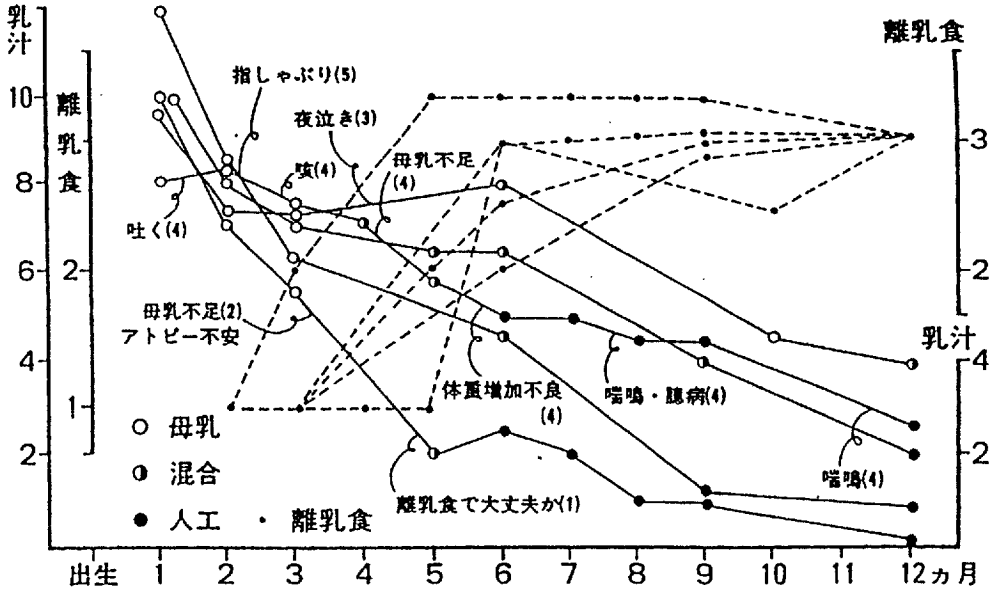


図3　Ⅱ　完全母乳3ヵ月→混合栄養→離乳食
(1) 男 児 5 例



Ⅱ　完全母乳3ヵ月→混合栄養→離乳食
(2) 女 児 5 例

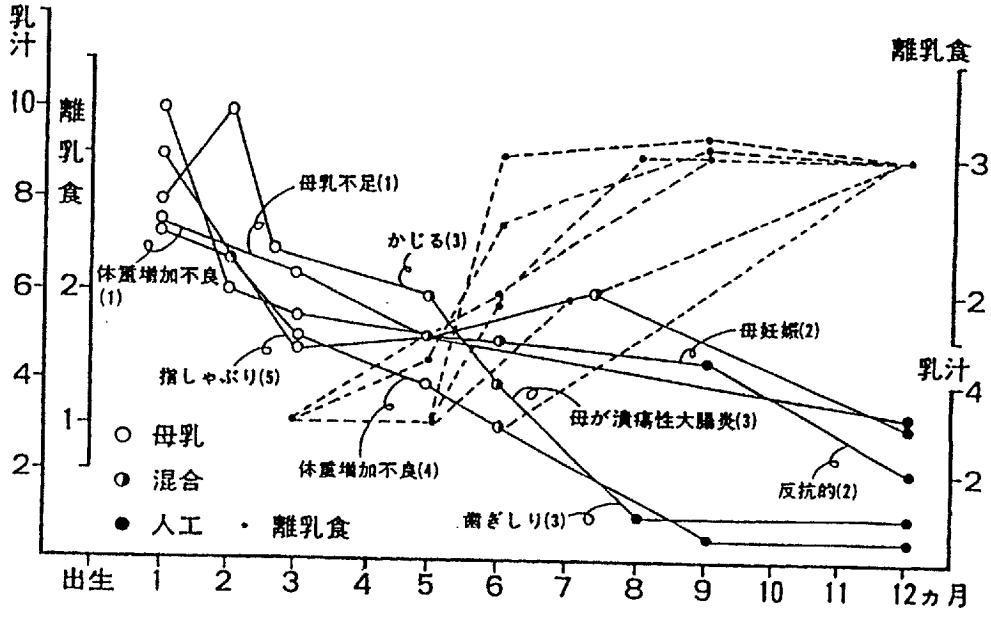
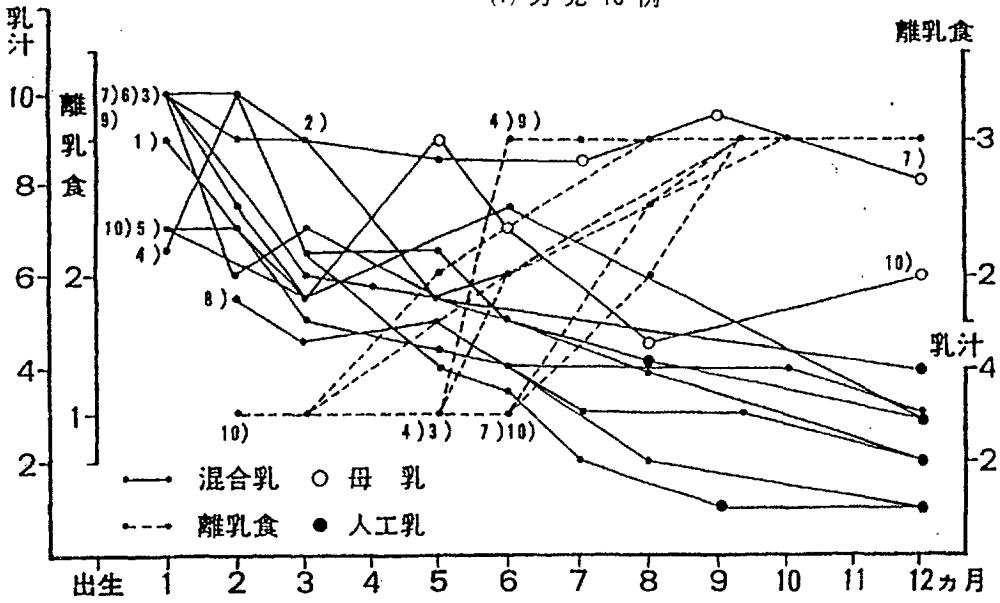


図4　Ⅲ　混合栄養6ヵ月→離乳食
(1) 男 児 10 例



Ⅲ　混合栄養6ヵ月→離乳食
(2) 女 児 10 例

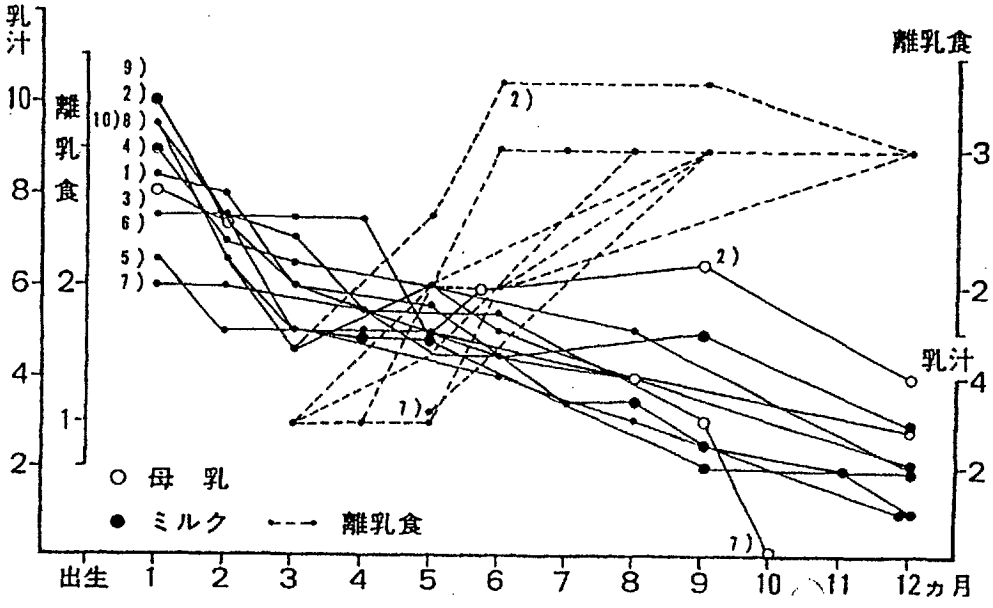
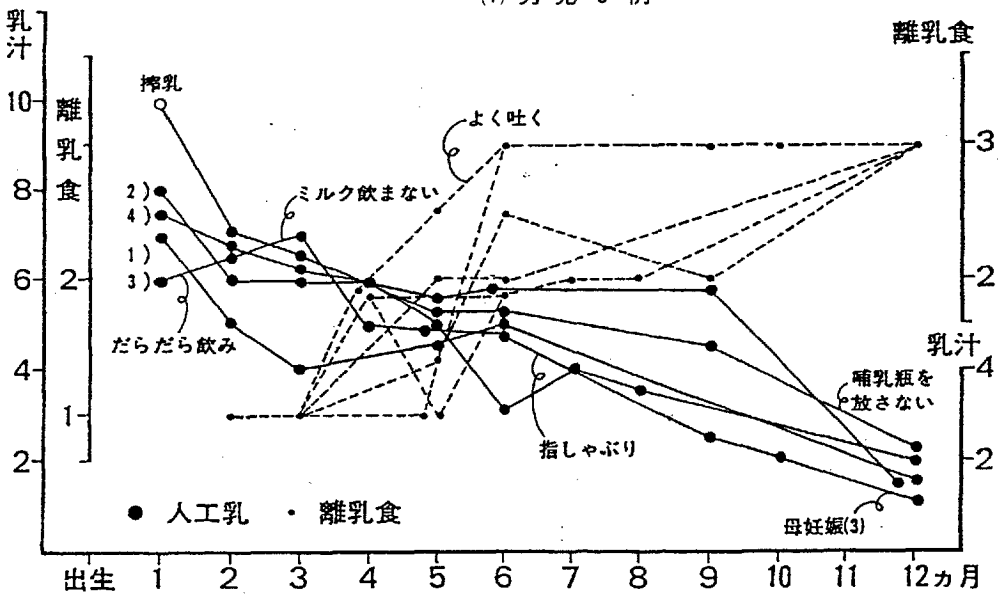


図5　Ⅳ　人工栄養→離乳食
(1) 男 児 5 例



Ⅳ　人工栄養→離乳食
(2) 女 児 5 例

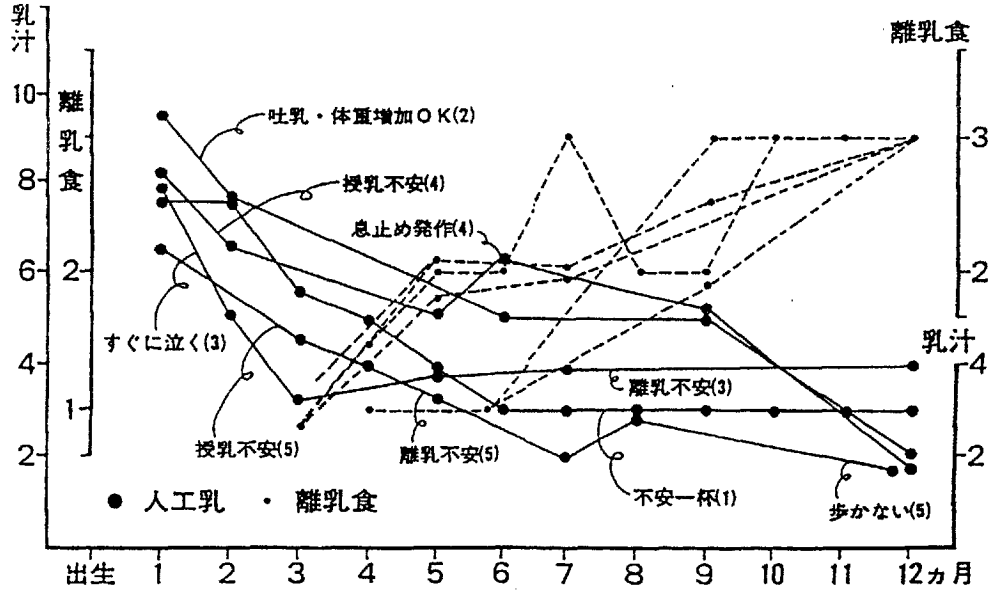


表１　栄養法別、*主訴・症状累積数
（＊栄養に関係した不安）

男　児

栄養＼項	No.	母親の平均年齢	乳健の累積回数	主訴・症状の累積数	累積頻度
母乳・６カ月	10	２７．６	５９	２９	４９．２
母乳・３カ月	5	２５．４	２８	２７	９６．４
混合・６カ月	10	３２．３	６３	５０	７９．４
混合・３カ月	10	２９．２	７０	４９	７０．０
人工乳	5	２５．０	３３	２０	６０．６
合計	40	－	２５３	１７５	６９．２

女　児

母乳・６カ月	10	２８．５	５８	３７	６３．７
母乳・３カ月	5	２８．２	２６	２２	８４．６
混合・６カ月	10	３１．０	６４	５４	８４．４
混合・３カ月	10	２８．８	６０	４３	７１．７
人工乳	5	２９．６	３２	２８	８７．５
合計	40	－	２４０	１８４	７６．０

要になってくる。そのためにも今後とも、断乳の時期に関して不明確な問題点である、う歯発生と母乳、酒・煙草と母乳、母親の感情起伏と母乳、断乳促進のための意図的方策である乳頭に辛子、乳房にこわい顔を書くなど子どもの心を傷つける方法などについてアンケート調査票を作り、今日的母親の断乳意識を明確に把握し、そこから子どもの心と体の健康を維持する母子関係の快適な展開に必要な指導内容を検討する必要がある。また医学的には異常妊娠、双胎妊娠、正常な体重増加を示さない妊婦、産後の精神状態、性器の正常復古、栄養学的には母親の体重が妊娠前のそれに復帰するまでの栄養学的断乳、乳児が2－3歳に到るまでに体験する様々な不安を解消するための心理学的断乳などの考え方をこの調査研究によって解明したい。

文献

1）南部春生：心理面からみた母乳栄養、小児医学、22（5）：918－936,1989

2）南部春生他：正常新生児の体重管理、周産期医学、20（3）：389－395,1990

3）佐藤真澄他：新生児栄養のすすめかた、周産期医学、増刊号、22：256－260,1992

4）二木　武：母乳栄養における離乳のすすめ方、新生児と母乳、NICU,158－163,冬期増刊号,1992

5）平山宗宏：母乳のやめ方、周産期医学、増刊号、22:318－320,1992

6）南部春生：混合栄養の実際、周産期医学、増刊号、22:343－347,1992

7）祖父江鎮雄：母乳と虫歯、新生児と母乳、NICU,77－83,冬期増刊号、1992

8）小林美智子：勤労婦人と母乳哺育、新生児と母乳、NICU,147－157,冬期増刊号,1992

9）服部哲夫他：人乳銀行と母乳の保存、新生児と母乳、NICU,90－95,冬期増刊号,1992

10）横田明重他：煙草・アルコール、嗜好品と母乳、新生児と母乳、NISU,142－146,冬期増刊号、1992

11）南部春生：母乳哺育と乳児の行動発達、Perinatal Care,夏季増刊号、11:177－184,1992

Abstract

Timing for Ablactation and Influence its Time Lag on Infants 1 st Report : Timing for Ablactation and Incidence of Anxiety Symptom by Feeding Haruo Nambu,Yachio Ohta,Hiroyuki Sawada, Tetsuo Hottori. Satoshi Okajima and Akira Sudo

In terms of the timing for ablactation, postnatal month 6 ～ 9 of month's recovery to normal body weight, 6 for prevention of decayed tooth 12of mother's worries and for infant's independence and spontaneous ablactation providing appropriate weaning guidance and practice are proposed,but no accepted opinion has been formed yet. A pre-examination was made to find out factors in judging earlier or later ablactation.

1）By feeding,groups of 6 month-breast feeding, 3 month-breast feeding, 6 month-mixed feeding, 3 month-mixed feeding and foemula feeding were examined for 12 month-time course of their nutritional con dition.

The 6 month-breast feeding group has completed weaning constantly on the basis of breast feeding.

2）Of these 5 groups,the 6 month-breast feeding group has been complaining of nutritionalanxiety at a significantly lower frequency than the formula feeding group.

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:断乳の時期については、母の体重が正常に復する 6〜9 ヵ月、う歯発症を予防するためには 6 ヵ月、母の焦慮、児の自立のためには 12 ヵ月、適切な離乳指導と実行があれば自然断乳と云われているが、定説はない。
断乳の早い、遅いを判断する因子を検討する目的で、その事前調査を行った。その結果
1.栄養法別には母乳 6 ヵ月群、母乳 3 ヵ月群、混合 6 ヵ月群、混合 3 ヵ月群、人工群の 5 群について、12 ヵ月間の栄養推移をみ、母乳 6 ヵ月群は終始母乳を基盤に離乳を完了していた。
2.各群の母親が栄養、発達に関して訴えた不安症状は母乳 6 ヵ月群が人工群に比し有意に低率であった。